半田良平 年譜

こちらから半田良平歌集を
お読みいただけます

半田良平は明治20年（1887）に深津に生まれ、宇都宮中学、旧制第二高等学校を経て東京帝国大学を卒業後、短歌結社「国民文学」の中心人物として短歌・評論など幅広く活躍しました。
没後の昭和24年には、歌集「幸木」で栃木県出身者としてはじめて日本芸術院賞を受賞しました。
半田良平の歌集は鹿沼市内の図書館で貸し出しています。

半田良平生誕130年記念事業（2018.3）

明治20年	0歳	9月10日栃木県上都賀郡北犬飼村深津に生まれる。父勝蔵、母キク。
23年	3歳	弟富三生まれる。
26年	6歳	北犬飼東尋常小学校（現在鹿沼市立津田小学校）に入学。素直でおとなしく、あまり目立たなかった。
29年	9歳	弟錦造生まれる。
30年	10歳	姿川尋常高等小学校（現在宇都宮市立姿川中学校）に入学。
32年	13歳	栃木県立宇都宮中学校（現在栃木県立宇都宮高校）に入学。
38年	18歳	この頃新聞短歌欄の投稿等で知り合った文学の友人に伊藤善四郎、福田謹四郎、千葉省三、松村英一、岡田道一などがいた。窪田空穂を中心として結成された十月会（新聞短歌欄の投稿家が集まってできた会）に加入。
39年	19歳	宇都宮中学校を卒業し受験準備のために上京。初めて窪田空穂に会う。仙台の第二高等学校に入学。
40年	20歳	十月会同人の合同歌集「白露集」が刊行される。
42年	22歳	第二高等学校を卒業し、東京帝国大学（現在東京大学）英文科に入学。
43年	23歳	十月会同人の第二合同歌集「黎明」を編纂し刊行する。
45年	25歳	帝大英文科を卒業、美学研究のため大学院に籍をおいたが、12月現役補充兵として召集され、大学院はやむなく退学。
大正2年	26歳	一年帰休兵として除隊となり、帰郷。
3年	27歳	母校（津田小）の創立記念日に講演をする。「国民文学」創刊。この頃アーサー・シモンズの評論集の翻訳に専念し、多くの文学雑誌に寄稿。芳賀郡長沼村（現在真岡市）の石崎美好と結婚。
4年	28歳	東京府下巣鴨に転居する。長女悠紀子生まれる。私立東京中学校の英語教師となる。再び歌を作りはじめる。
6年	30歳	長男宏一生まれる。予備勤務兵として召集される。
8年	32歳	次男克二生まれる。事故で母キクを喪う。処女歌集「野づかさ」を出版する。
9年	33歳	「名所めぐり旅行歌選」編纂し刊行。
10年	34歳	三男信三生まれる。
11年	35歳	上落合に転居する。
12年	36歳	「芭蕉俳句新釈」を出版する。後備兵として召集される。二女佐伎子生まれる。
13年	37歳	歌論集「短歌新考」、新釈和歌叢書「大隈言道歌集」「香川景樹歌集」刊行。
14年	38歳	「季題別芭蕉俳句全集」「季題別一茶俳句集」「季題別蕪村俳句集」出版。
昭和2年	40歳	松村英一、植松寿樹と共に大阪中の島公会堂の講演会に臨む。「李花集」「金塊和歌集」を校訂して出版。
5年	43歳	11月 上落合に完成した新居に移転。「短歌雑誌」に「古歌より見たる上代関東の交通路」を執筆。
6年	44歳	改造社の「現代短歌全集」半田良平篇に、大正4年から昭和5年の作品380首を収める。また同社の短歌講座に「百人一首講話」と「添削実例」を執筆。
7年	45歳	春陽堂版の明治大正文学全集の中の「短歌俳句篇」に122首を自選して掲載。「国民文学200号記念歌会」に出席。東京中学の野球部長となる。
8年	46歳	「アララギ」25周年記念号に「回顧談」を執筆。丸山雄二郎と「国文要語辞典」を共編し出版。
9年	47歳	日本文学講座に「紀貫之」を執筆。
10年	48歳	「仏法僧の歌」を「野鳥」に掲載。JOAK（東京放送局）より「短歌形態の成立」を放送。
11年	49歳	JOAKより「早春の短歌と俳句」「初夏の短歌と俳句」を放送。
12年	50歳	「赤石山系縦走吟」50首を「短歌研究」に発表。「金槐和歌集」を校訂し刊行。JOAKより「歌壇の現状」を放送。歌論集「短歌詞章」出版。「半田良平半切頒布展覧会」に出席。JOBK（大阪放送局）よりラヂオ短歌の選評を放送。
13年	51歳	長女悠紀子、林氏と結婚。父勝蔵逝去。「平賀元義歌集」を植松寿樹、野田実と共編して出版。
14年	52歳	「人麿忌」にJOBKの「万葉集座談会」に出席。外孫、林惇子生まれる。
15年	53歳	河出書房の「現代短歌」第2巻に「旦暮」と題して308首（昭和11年～14年の作）、続いて弘文館の「現代短歌叢書」第1巻に200首を選出。
16年	54歳	長男宏一病臥。
17年	55歳	4月次男克二逝去（23歳）。5月長男宏一入院。宇都宮市の叔母の墓所に歌碑建立。
18年	56歳	1月 肋膜炎にて臥床。2月 長男宏一逝去（27歳）。良平は入院加療、「国民文学」の選歌は当分松村英一が代わる。4月退院。5月 腹膜炎の症状があり絶望と言われるが11月よりやや快方に向う。8月 三男信三出征。
19年	57歳	3月 墓参のため帰郷。信三フィリピンより国内に帰ったが再びサイパンに転じ、7月戦死（23歳）。10月 肋膜炎再発。
20年	58歳	2月頃より病気軽快。その間「万葉集語彙考」三篇を「短歌研究」に発表。3月 臥床中の良平は風邪にかかるが、空襲が激しくなり安静を保てず、5月19日永眠。
	没後	
昭和23年		歌集「幸木」西郊書房より出版。
24年		5月25日 文部省第1会議室で第5回日本芸術院賞文学の部に「幸木」を選定。11月3日 栃木県第1回文化功労賞として半田良平（文学）、浜田庄司（工芸）、川上澄生（版画）、植木義雄（宗教）、関本平八（植物）、丸山瓦全（考古学）の6人が表彰される。
25年		5月17日津田小学校で半田良平の歌碑除幕式が行われる。植松寿樹、半田良平賞を創設。（～昭和34年）
32年		5月19日 13回忌を機に墓碑建立。
33年		2月 「半田良平全歌集」国民文学社より刊行。
53年		半田良平顕彰会発足。花木センターに歌碑を建立するとともに、津田小学校に良平文庫を設立し、多くの図書を寄付。
61年		11月23日 生家に歌碑建立。
平成2年		3月 鹿沼市松原近隣公園に歌碑建立。
29年		12月 生誕130年記念事業「半田良平の生涯と作品展」「生誕130年記念のつどい」開催

年譜は国民文学社「半田良平全歌集」、半田良平顕彰会「半田良平先生年譜」を引用しました。

ただ一首の歌にその名をとどめたる わが下野の今奉部与曾布

① 津田小学校の歌碑
（鹿沼市深津 1390）

有名な歌をただ一首だけ万葉集に残した下野出身の防人、今奉部与曾布（いままつりべのよそふ）に感動し自分も後世に残る良い歌を作りたいという気持ちを詠んだ歌である。

良平の歌集『幸木』の日本芸術院賞受賞及び栃木県文化功労賞受賞を郷土の誇りとして顕彰しようと良平の母校津田小学校後援会が中心となり北犬飼村民、児童生徒、門下生、遺族などの協力を得て昭和二十五年に建立された。

選歌と揮毫は良平の歌の師窪田空穂氏。裏面の文字は石川富壽氏。石工は山崎喜代松氏。

たはやすく雲のあつまる秋ぞらを みなみに渡る群鳥のこゑ

②花木センターの歌碑
（鹿沼市茂呂 2086-1）

良平には三男二女の子どもがいたが長男二男を病気で亡くし、三男信三はサイパン島で戦死している。秋空の雲の中を南に移動する渡り鳥をみて、わが子信三が眠るサイパン島へ一緒に飛んでいきたいという心情を詠んだ歌である。

良平の三十三回忌にあたり設立された半田良平顕彰会が中心となり、鹿沼市民の協力を得て昭和五十八年に建立された。

選歌は江連白潮氏。題額は古澤俊一氏。歌と裏面の文字は石川富壽氏。施工者は田崎武氏、神山新一氏。ブロンズ像は御子貝久志氏。

ふる里の家の門みち 長ければ ゆきかへり見つ 日の暮れかたを

③半田良平生家の歌碑

久しぶりに帰郷した良平が、思い出の多いふさとの長い門みち行き帰りしながら、落日の冬景色を眺め、懐かしんで詠んだ歌である。

良平の弟富三の長男重郎氏が伯父良平を記念して昭和六十一年十一月二十三日建立した。

揮毫は良平の次女笠原佐伎子氏。

③ふる里（半田良平生家）の門道

④松原近隣公園の歌碑
（鹿沼市松原）

この原ゆ ただにそばたつ 男体の 山をかしこみ 草に坐てあおぐ

男体山は子どものときから朝夕遠く眺めてきた親しみのある山である。戦場ヶ原を訪れ、間近に男体山を見上げていると雄大で威厳がある。かしこまって草原に坐って見上げてしまったという感動を詠んだ歌である。

松原近隣公園の調整池の南にある。松原団地の造成にかかわった建設会社と鹿沼市により平成二年に建立された。揮毫は稲川武氏。

⑤叔母の墓所の歌碑
（宇都宮市兵庫塚）

手ひとつに九人の子らを そだてたる刀自のみ魂ぞ 此処にこもれる

夫と死別後、手ひとつで九人の子育てをした叔母の苦労を偲び、冥福を祈って詠んだ歌である。叔母とは良平の母キクの妹テイ子である。

この歌碑は細谷英雄氏が亡き母に感謝し冥福を祈って昭和十七年に建立した。

英雄氏の懇請により作歌したこの歌は三年以上かかって生まれたと言われている。

揮毫は良平の自筆で、良平生前の歌碑である。

⑥塩原の歌碑
（那須塩原市下塩原）

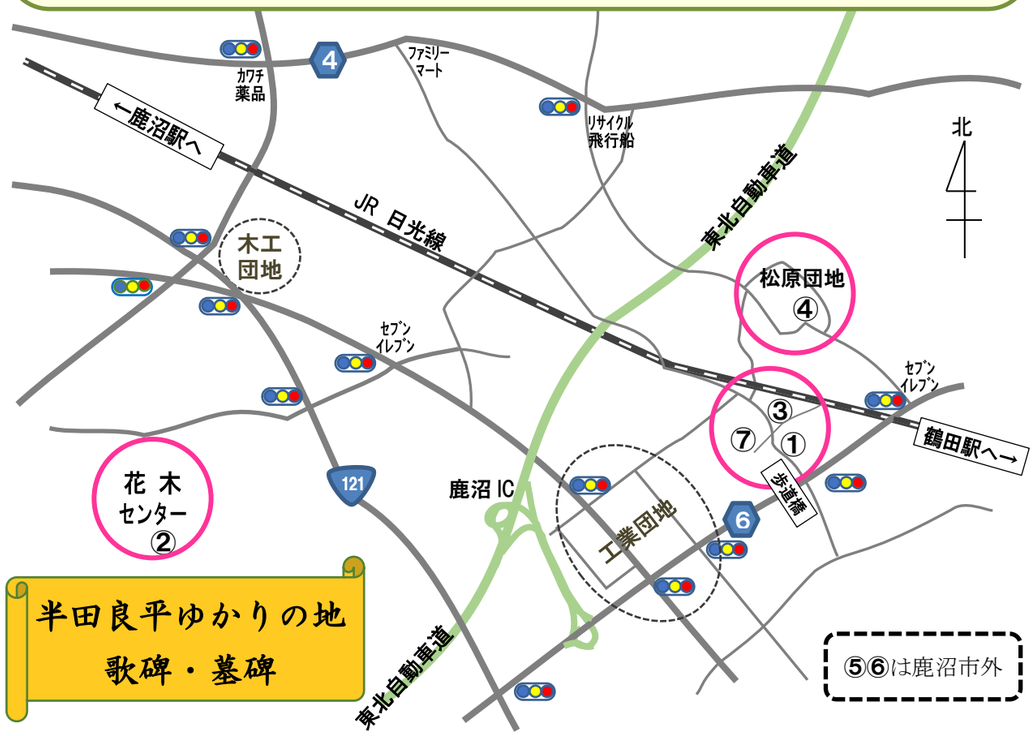
山川の清き瀬みればこの日ごろ せはしく生くる空しさを知る

大正八年秋に東京私立中学校の生徒を引率して塩原温泉を訪れたときの作である。

都会生活から離れ、紅葉した渓谷の清流を眺めての感慨を詠んだ歌である。

歌碑は妙雲寺の文学の森を経た山中に建っている。

だれが、いつ建てたかについては不明。



墓碑

良平の墓碑は、生家の西方約三百メートルの小高い丘の墓地にある。

良平は昭和二十年五月一九日永眠。

墓碑名は「半田良平の墓」とあり、良平と共に長男宏一、次男克二、三男信三の三人の子と美好夫人が眠っている。

美好と半田門下により、昭和三十二年五月十九日十三回忌に建立された。

次の歌は良平が生前（死の直前）墓前において詠んだ歌である。

晴れし日は朝より照りてあたたかき
この墓原に子らは臥せる
この土の下にねむれるわが子らと
墓並べむは幾とせの後

⑦墓碑

歌碑・墓碑の説明は安野静治著「半田良平の歌碑・墓碑」を引用しました。